

この1年間、我々は地球規模の危機的状況の中で暮らしてきたと語ることができる。
しかし、よくよく考えてみると、この「地球の危機的状況」は「地球」というより人間という1つの種の危機ではないだろうか。そして人間以外の種にはチャンスではないだろうか？これは「人間社会＝地球」という傲慢で利己的な人間の物差しで判断する視線ではないだろうか？と私は考えてみた。

COVID-19 大流行の中で地球上の人類のあらゆる活動に歯止めがかかる。そして強制的に活動が中止された。

しかし、止まってしまった社会で、様々な不便さがもたらした変化は、この状況にさいなまれる人間を除いたすべての地球構成員には非常に肯定的な変化だった。

その一例として、不可能な理論と思われていた多様な環境政策が強制的に執行され、中国全土の工場が一斉に停止し、道路の車が運行を止めると東北アジア全体の空気の質が良くなり、空の色が変化した。結局、問題は人間の欲によって発生し、その変化は人類がもう少し不便を感じれば可能な話だった。すべての問題は、人間以外のことを考えず、ただ一つの種により安らかな生のためのものであり、利己的で傲慢な油断が自然に及ぼす副作用だった。

この1年で私たちは自然の復元する能力を目の当たりにすることができた。

そして、私たちは自然復元能力を都市の至る所でも確認することができた。私たちが何気なく通り過ぎる廃墟、時が止まってしまったような場所、人が去った場所で、自然はまた自分の場所を取り戻し、蘇る。都会の隙間に生えている植物は、我々がこの状況で、生き残るためにもがいている姿を代弁しているかのようだ。このように自然の驚異的な姿を、生活の中で目にしながら生きているが、それを敢えて気にしないようにして通り過ぎてしまう。

このような状況に対する認識は、今回の作品の重要な点だ。現在、人間社会の発展は自然の消滅を意味する。共生の均衡を保つことができず、相反する現象に頼らざるを得ない状況だ。わたしは、その点について反省し、考えてみようと思う。

今回の作品は、人類と自然共生に関する話であり、人類の欲によって発生した問題と自然の回復力が共存し、循環する構造を視覚化しようとする作品である。

チャン・ジェヨブ